この一年に出会った動物たち

*大久保 嘉雄

2021年はたくさんの動物に出会うことができた。赤いジムグリ、ツキノワグマ、コウノトリ、翌年１月２日にはニホンカモシカを撮影することができた（図１）。

大滝神社奥ノ院のブナ林に40年間通っているが、道すがら思うことがある。足下の植物について何も知らない。観ようとしなければ見えない。しかし、観ようとしても見ることができないのはもどかしい。偶然に頼るか、確率を上げるしかない。後者には、その生態を知り、頻繁に出歩くしかない。この一年は「偶然」の出会いが重なり、幸運な年だった。

１ 赤いジムグリ　2021年５月15日午前７時30分頃、あわら市椚（剱岳地区）

自転車で走っていたら、道路の先に赤いひものようなものを発見した。「ヘビ？」。そのまま草の茂みに逃げていくかと思ったが動く気配がない。手前で自転車から降り、恐る恐る近づいた。ペットの外来種を捨てていったのか？毒蛇でないか？急いでスマホを取り出し撮影した。細くて小さい。体長は40㎝くらいである。漸く気づいたのか、道路横の茂みへと動き出し、側溝のすき間に身を隠した。探していたわけでなかったが、めったにない出会いだった。

家に帰ってインターネットで調べたら、ジムグリらしかった。後日、写真を福井県両生類は虫類研究会会長の長谷川巖氏に見ていただいた。ジムグリのアルビノということだった（図２）。白ヘビは聞いたことがあるが、赤ヘビがアルビノとは意外だった。

ジムグリは成体と幼体で色彩に違いがあり、成体は赤みがかかった茶褐色、幼体は鮮やかな赤色の地に黒の縞が入るが、縞は成長につれて小さくなるという。私が見たものは、体長が約40㎝と小さいので幼体だろう。は虫類の色素胞は真皮にあり、上から下にかけて黄色、赤色、虹色、黒色色素胞が存在するという。幼体の黒の縞が淡いオレンジになれば私の見た赤ヘビとなる。要するに黒色色素胞がなくなった幼体だったのだろう。頭部を拡大したら目は黒でなく赤いようすなので、まさに黒色色素を欠いたアルビノである。

図１ 発見した場所

１ 赤いジムグリ あわら市椚 2021.5.17
２ ツキノワグマ あわら市権世市野々 2021.6.12
３ コウノトリ 福井市中町 2021.6.18
４ ニホンカモシカ 勝山市平泉寺 2022.1.2

＊ 福井県あわら市花乃杜一丁目15-22

図２　赤いジムグリ－あわら市椚、2021年５月15日－
左　発見した場所のようす。道の前方に赤いひもみたいなものを発見（合成写真）
中　体長約40㎝。側溝のすき間へ隠れた　　右　頭部のようす

図３　電柱の先端に立つコウノトリ
－福井市中町、2021年６月18日－

図４　ニホンカモシカ－勝山市平泉寺町、2022年１月２日－
左　発見した場所のようす
右　約１分間こちらをじっと見ていた

ジムグリは成体になると、赤色が減っていくのか、黒色が増えていくのか気になるところである。私の見た赤いジムグリが成体になった時は、どのような色になるのだろうか。前者なら黒がなく赤が少なくなるので淡い赤みがかった白ヘビになり、後者なら赤は残っているので全体が赤っぽいヘビになるのだろうか。

２　ツキノワグマ　2021年６月12日午前６時頃、あわら市権世市野々（剱岳地区）

あわら市権世市野々は刈安山（標高548m）への林道の入り口の村である。自転車を走らせ村を通過した後に、左手の雑木林から林道にツキノワグマが現れた（標高90m）。目の前を20mほど走った後、再び林にもどっていった。短い間だったので撮影もできず、ただ見送るだけだった。体長１mくらいで若い個体のように思われた。刈安山では25年間に２回ツキノワグマに出会ったことがある。いずれも中腹の林道沿いで（標高約350m）で、今回のような人里近くは初めてである。後日、八十代と思われる女性と六十代と思われる男性の村人に聞き取りをした。「秋にクリの被害にあうが、出会ったことはない。集落付近で見たということも聞かない。」ということである。

冬ごもり明けの空腹時期でなく、また冬ごもり前の食いだめ時期でもない６月の集落近くの出没

に、「新世代クマか？」というのが第一印象だった。いわゆる、里慣れしたクマである。繁殖期は６月から始まるというので、繁殖のために行動域を広げた可能性もある。2021年12月８日付け福井新聞で「県内クマ出没 大幅減、昨年(大量出没年)の３割」という記事が掲載された。

ツキノワグマの大好物はブナの堅果である。ブナは豊凶（マスティング）があり、広い範囲で同調している。大滝神社奥ノ院のブナ林の豊凶とツキノワグマの捕獲数の関係を調べたことがある。秋に山に食べ物がないと里に下りてくると言われるが、福井県では明瞭な関係がみられなかった。ツキノワグマに出会うのは６回目だが、今回も撮影できずに残念だった。ツキノワグマを狙って撮るには、生態の熟知と装備、回数の積み重ねが必要だろう。

福井県のツキノワグマの生息数は、嶺北地方では370～800頭、嶺南地方では230～240頭という（2021年８月24日付け福井新聞)。県のレッドデータブックでは、絶滅に関する指定はない。図５に環境省自然環境局のクマ類の捕獲数（許可捕獲数）のデータから福井県の捕殺・非捕殺数を示した。福井県全体の推定生息数1000頭に対して、近年の年間捕殺数100～200頭でも個体群が維持できるのだろうか（生息域は県境をまたいでいるだろうが)。昔の狩猟圧は今の捕殺数と同じくらいだったのだろうか。「有害捕獲個体の平均年齢はオス5.8歳、メス6.2歳」「性成熟はオス２～３歳、メス４歳」「母グマは冬ごもりの穴で１～２頭出産し、２年後に生殖可能になる。」という。この繁殖様式で個体群を維持できるしくみに興味は尽きない。

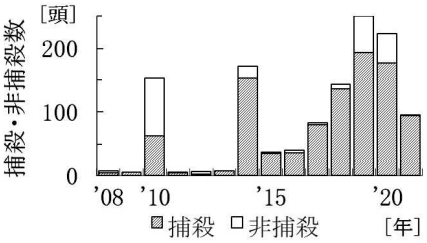

図５ ツキノワグマの捕殺・非捕殺数
2008年～2021年(11月末暫定値)
環境省自然環境局のデータより

3 コウノトリ　2021年６月18日午後６時頃、福井市中町（川西地区）

福井市上一光町に設置した温度記録計の交換の帰り、水田の向こうの電柱に一羽のコウノトリを発見した（図３)。５～７㎞北東にはコウノトリがよく降り立つ福井市鶉地区や、58年ぶりに雛が巣立った坂井市春江町大石地区（2019年）がある。道際にはコウノトリの絵が描かれた「わき見注意」の看板もみられた。近年、頻繁にみられるのだろう。

福井県での最初の放鳥は2015年10月３日、越前市白山地区で行われた。頭上を飛ぶ姿に「昔はこんな大きく美しい鳥が飛んでいたんだ。」と感激した。その年の夏にはコウノトリの野生復帰の先進地、兵庫県豊岡市を訪れていた。豊岡市の放鳥は2005年に始まり、水田にあたりまえのようにコウノトリがいた。人々も気にとめるようすはない。その風景が福井県でも見られるようになったことは感慨深い。コウノトリを支える生き物やすみ場所も今以上に回復して欲しい。

4 ニホンカモシカ　2022年１月２日午後０時15分頃、勝山市平泉寺

参道のブナ林に設置した温度記録計の回収の帰り、雪の積もる集落内で出会った（図４)。あわら市刈安山では一年に何度も出会うが、写真を撮る目的で行くといつも空振りである。ニホンカモシカは出会ってもじっと見つめて動かないので、撮影しやすい動物である。それでも撮影に成功したのは初めてである。年始めから調査に出たので、神様が「お年玉」をくださったのかも知れない。